文献紹介

# 海外舞踊文献紹介（フランス）

安田　　靜

既に『舞踊学』第25号（2002）において，1980年代以降に出版されたフランス語の舞踊関連文献について，主要なものを取り上げて紹介した。

そこで本稿では，主に21世紀以降に出版された舞踊関連の文献のうち，フランス語のものを中心に取り上げる。

## １．歴史研究

- Isabelle GINOT et Marcelle MICHEL, *La Danse au XX^e^ siècle*, Larousse, 2002.

第25号でもすでに取り上げたジノー（現在パリ第８大学教授）とミシェルの共著（初版1995年）は，出版社がボルダス社からラルース社にかわり，2002年に第３版が出版された。

この版には，すでに伝統的な意味で「作品」として成立するかどうかすら危ぶまれる試みを映し出す写真とともに，世紀末から21世紀への傾向について新たな章が加えられている。経済，制度，文化政策に関する批判再燃の指摘，広く一般受けする完成型「コンテンポラリー・ダンス」とそれを批判する動向の分析，舞台／観客という関係及び視覚そのものにまつわる根源的な問いの指摘などが並ぶ。「アカデミズム」や「制度」を必要以上に敵対視する著書全体の傾向はさておき，近年の潮流を手際よく理解し把握するための良き助けとなるだろう。

## ２．バレエ及びダンス・コンタンポレンヌ全般に関するもの

- Rosita BOISSEAU avec René SIRVIN, *Panorama des Ballets: Classiques et néo-classiques*, Textuel, 2010.
- Rosita BOISSEAU, *Panorama de la danse contemporaine: 100 chorégraphes*, Textuel, 2008.

図版が多数あり，フランス語が読めない場合でも参照の価値があるものとして，BOISSEAUがまとめた上記２冊を挙げておく。

まず，*Panorama des Ballets*ではバランシンの『アゴン』からノイマイヤーの『(マーラーの）交響曲第３番』まで全50作品のタイトルがabc順に並び，各々の作品には初演年度や筋書き，上演記録などの概略と，ダンサーへのインタビューが収録されている。質問内容に若干の相違はあるものの，「いかにして○○役を構築しましたか」「身体のどの部分，どの動きにバレエ作品の本質が秘められていると思いますか」「観客に何を伝えたいですか」などの問いを，作品毎に異なるダンサー（一部重複）に投げかけて答えを得ている。

また，各作品にはvariation（ダンスの「ヴァリエーション」と，同名別ヴァージョンの「変奏」の意味を兼ねている）の項目がある。例えば『コッペリア』ではサン＝レオンの古典バージョン（1870）に加え，マランのバービー人形風読み直しバージョン（1993）も取り上げてあるし，ストラヴィンスキー作曲『結婚』については，ニジンスカのオリジナル版（1923）に加え，プレルジョカージュ版（1989）の説明（５枚の舞台写真つき）がある。

特筆すべきは『白鳥の湖』の項である。ヌレエフ版が最初にオペラ座で上演された際（1984），王子と家庭教師（ロットバルトと二役）の関係については，オペラ座図書館に保管されているプレス資料を読む限りヌレエフ自身の口から語られることはついぞなく，新聞・雑誌もあえて明らかにしようとはしていなかった。唯一プラーテルが「王子と家庭教師／悪魔の間には何か曖昧なものがある」と答えたインタビューが残っている程度だ。

ところが本書では，ノイマイヤー版，即ち王子とババリアのルートヴィヒ二世を重ね，後者の同性愛志向を前面に打ち出した『幻想～白鳥の湖のように』(1976）と並べて，ヌレエフ版も「同じトーン」で王子がいかに家庭教師に惹かれているかを強調している，と明快に述べている。時代は随分変わったものである。なお，タイトルには特に記されていないが，50作品の多くはパリ・オペラ座バレエ団のレパートリーである。

さて，もう１冊の*Panorama*では，合計100人のコンテンポラリー・ダンスの振付家をアルファベット順に取り上げている。こちらも同様に，振付家の略年表と簡単な経歴紹介に加え，共通の質問事項への答えで構成されている。

各振付家の現状と若い（幼い）頃の写真が並置されている他，振付家自身の手による振付覚え書き（デッサン，言葉によるメモ，フロアパターンのスケッチ，絵コンテによるシークエンス説明などスタイルは様々である）は特に興味深い。

Rosita BOISSEAU et Christian GATTINONI, *Danse et art contemporain*, Scala, 2011.

またしてもBOISSEAUだが，こちらは現代アートに強いGATTINONI（アルルの写真学校教師）との合作で，コンテンポラリー・ダンスの諸作品をテマティック毎にざっくりと分類している。

例えば，「多かれ少なかれ独立の」の項目はさらに「総合芸術というファンタスム」「独立／平等／自由」などに細分化され，前者にはニコライやドゥクフレ，後者にはカニンガム，ブラウン，チャイルズなどの名前が並ぶ。「多かれ少なかれ身体の」の項目には，「ダンスとヴィデオ」「非物質化」等の細目があり，前者にジョゼ・モンタルヴォ，後者にダム・タイプなどの名前が挙がっている。

このようなテマティックによる分類自体はフランスでは珍しくはないものの，本書の手法は（巻末の書誌リストには挙がっていないが）Matthew COLLINGS, *This is Modern Art*, Weidenfeld & Nicolson, 1999; Seven Dials, paperback edition first published in 2000に大変よく似ている。

COLLINGSは難解と言われるモダン・アートを６つの類型（“I am a Genius”, “Shock, Horror”, “Lovely Lovely”, “Nothing Matters”, “Hollow Laughter”, “The Shock of the Now”）に分類し，豊富な写真――Damien HIRSTの牛の輪切りホルマリン漬けをはじめ，図版の多くは初めて現代アートに触れる日本の若い読者にとって相当にショッキングであるようだ――と共に，わかりやすく紹介している。つかみどころのない作品も，こうした「グループ化」によって俄然，馴染みやすくなるだろう。

### ３．ダンスという哲学

Laurence LOUPPE, *Poétique de la danse contemporaine: La suite*, Contredanse, Bruxelles, 2007.

題名通り，2002年の文献紹介で以前にも取り上げた同タイトル著作の続編である。前書き冒頭に同時代のバレエ評論家Jean-Marc ADOLPHEの“corps critique”（批判的身体）というタームと定義（Un corps critique, c'est l'artiste qui se sert de son corps pour élaborer une pensée sur le monde.）を掲げ，ベンヤミン，アドルノ，ドゥルーズといった哲学者やパクストン，ベルらコンテンポラリー・ダンスの振付家のフレーズを引用しながら，舞台上の身体と映像の共存や，身体にあらざるもの（例えば風になびくドレス）のダンス，といった問題について取り上げている。

Isabelle LAUNAY et Sylviane PAGÈS (sous la direction de), *Mémoires et Histoire en Danse*, Mobiles n°2, L'Harmattan, Paris, 2010.

パリ第８大学教授のロネと助教授パジェス編纂の論文集。編纂者両者や他大学教授の論文の他，博士論文準備中の学生による論文も多数収録されている。特に，Axell LOCATELLIのDEA論文からの抜粋であるラバンの*Schrifttanz*のフランス語訳とコメントは貴重である。

Simon HECQUET et Sabine PROKHORIS, *Fabriques de la danse*, Collection Lignes d'art, Presses Universitaires de France, 2008 (2007).

2007年初版。2008年再版の表紙には，Prix du meilleur livre sur la danse, décerné par le Syndicat de la critiqueとある。巻末の人名索引で，フイエ，ラバン，ニジンスキーといった（舞踊記譜を行った）振付家と並び，特にページ数が多いのはフーコー，フロイト，ボルヘス，セルバンテスといった哲学者・文学者で，舞踊記譜法を補助線として，「見る」という行為に関する興味深い考察が積み重ねられている。

### ４．個々の振付家に関するもの

John Neumeier, *In Bewegung*, Collection Rolf Heyne, München, 2008.

総ページ数578, 多数の写真が散りばめられずっしりと重いこの本は, 1973／1974年ノイマイヤーのハンブルク・バレエ団舞踊監督就任以来のシーズンから2006／2007年シーズンまでの全作品（ハンブルク・バレエ団によるハンブルク市内外の公演及び外部カンパニーへの旧作・新作の振付を含む）をカバーしている。（執筆）協力者（Mitarbeit: Brigit PFITZNER）の名前はあるものの，Texte von John NEUMEIERとある通り，公演プログラムなどに掲載された文章の他，シーズンごとの回顧に至るまで，相当量のテクストはノイマイヤー自身によるものだ。ドイツ語文献だが，資料的価値の高いものとして挙げておく。

このほか，プレルジョカージュについては，ベネシュ・ノーテーションや振付メモが収録され，DVDも付属のアクリルケース入り美装大型本，Françoise CRUZ, *Angelin Preljocaj - Topologie de l'invisible*, Naïve, Paris, 2008が，エックについてはオランダ語と英語併記，350枚の写真主体（こちらもDVD付属）でLesley LESLIE-SPINKS (Photography), Margareta SÖRENSON (text), *Mats Ek*, Bokförlaget Max Ström, 2011という大型本がクロス・メディアの形で出版されている。

また，ペーパーバック版では，ピナ・バウシュに関するものとしてGAUTHIER (2008) やBENTIVOGLIO (2007) の著書（いずれもL'Arche出版）の他，コンテンポラリー・ダンスの振付家に関する書籍が近年続々と出版されている。

### ５．その他

Philippe NOISETTE, *Couturiers de la danse*, La Martinière, 2003にはシャネル，サン＝ローランから川久保玲まで，有名デザイナーによる忘れがたい舞台衣装の写真の数々がスケッチや生地見本とともに並び，壮観である。

最後に，以前は書籍版のみだった*Chiffres clés*（フランス文化政策の実情がわかる各種統計資料集）は，現在Ministère de la culture et de la communication（文化コミュニケーション省）のサイトでPDF版で閲覧できるようになった。ぜひ活用されたい。